


代用品だったローマ字

ローマ字は、今までは世界の文字の中で、最もすぐれた文字であると考えられていました。ところが、表音文字は、文字の生命である最も大切な“思想”を直接に表わすことのできない文字であり、機能上決してすぐれた文字ではないことが、次第に多くの人々に指摘されるようになってきました。

ローマ字が、そのもとは象形文字であったことは確かです。しかし、それが今のように表音文字になったのを、文字の発展と見たのは間違いだったのです。それは大変軽率でした。

なぜなら、文字を持たない民族が、文字を持つ先進国の文字を取り入れる時、表音文字という形でしか取り入れることができないからなのです。これは明瞭な歴史的事実です。

A は“アレフ”という“牛”の意味の象形文字でした。A を遂にして  にしてみれば、牛の頭を象かたどったことがよくわかるでしょう。この A を、

自国語を表わす文字として借り入れるには、牛という意味を棄てて、ただ“ア”という音を表わす文字としなければなりません。ちょうど、わが国で、“波”の“なみ”という意味を棄てて、ただ“は”という音を表わす文字として漢字を取り入れたのと同じことです。

つまり、文字の表意性を棄てない限り、外国の文字を借用して、自国語を表現することはできないのです。表音性に頼ることだけが、他国の文字を借り入れる場合に許された、ただ一つの方法だったのです。

だから、表音文字は、文字の発展として出現したものではなくて、文字の機能上、不便であるのを承知で、止むを得ない便法として誕生したものなのです。表音文字はすぐれた文字だというのは、とんでもない曲解と言わなければなりません。